蜜蜂と老人

仲根弘樹

老人は淡雪が融け始めた土手を、足元を選びながら下った。
葦の藪に囲まれた南向きの窪地は、そこだけがどこよりも早く雪が消え、枯草が積み重なり暖かく、老人お気に入りの場所だった。
老人は腰を下ろし、尻の下に両手を差し込み枯草の感触を確かめ、霞がかった周囲を見回した。
弱々しい冬の光を浴びた窪地には、気の早い薄紫の米粒ほどの花が咲き、ほのかに雪融けの湯気が揺れていた。
老人は西に目を向けた。
北アルプスの残雪が青白く煌めいていた。
槍ヶ岳、常念、燕岳、蓮華岳、そして白馬岳、老人は一つ一つの山を確かめるように仰ぎ見て、
「後……何日この山を見れるのか……」
と寂しそうに呟いて、再び白馬岳から蓮華岳に戻り、餓鬼岳と燕岳の間にある少し低い前山の有明山に目を移し、懐かしそうに見入った。
燕岳を水源に、有明山を流れ下る中房川の扇状地、安曇野、北穂高村が老人の母の里で、南瓜一つを奪い合い、命を落す事もさして珍しくもなかった戦後の混乱期、母に連れ添って親戚筋を物乞い同然に訪ね回り、罵倒され、追い払われた古い思い出だけが残る里で、母はそれ以後、二度と里に戻る事なく、意識して有明山を避け里の話はしなくなった。
それでも老人にとって母の生まれ育った母の里山はそれなりの懐かしさを感じさせ、母亡き後はある種の意味を持った山となった。

老人の母は老人が十八歳の時、急性緑内障で失明し、それ以後、老人と二人だけの侘しい暮しが始まり、四十三年後の昨年二月、この世を去っていた。
老人の母は、それまで長男夫婦と暮らしていたが、当時は大変な住宅難、地方都市とはいえ一軒に何世帯もが間借りしていた時代で、たとえ二部屋だけの長屋でも、他人の入らない家族だけで暮せるのは幸せの方だった。
しかし、長男夫婦に男の子が生まれた頃から家の狭さから母と長男夫婦は揉めだし、その心労か、はたまた永年働き続けた苦労が祟ったのか、母は僅か四日で闇夜の住人となった。
その当時、社会保険等は一部の大会社か公務員だけ、一般には何の福祉制度も無い時代、病院の支払は全額実費。共倒れを恐れた長男夫婦は母を病院に置き去りにし、一方的に絶縁、別の街に引っ越して行った。

その頃の母には一番上の連れ子を含め六人の子供があったが、三人の娘はすでに姑の居るその日暮しの貧しい家に嫁ぎ、母に残ったのは当時十八歳の老人と三歳下の弟だけで医者にかかる金がなく、中耳炎をこじらせ難聴な老人が、手に職を付けるべく、住込みで働いていた木曽谷の漆器工房での修業を断念、母の方に戻り、その日から明日の糧に怯える四十三年間に渡る二人だけの暮しが始まった。

母と暮し始めたものの、まだ社会の荒波も、人の冷たさも知る由もない十八歳の身には、財産一つなく、その上に失明した母を背負うには余りにも荷が重く、たちまちにして生活は行き詰まり、病院にすら通えなくなった。

こうなると親族、知人の逃げ足は早く、蜘蛛の子を散らすごとく消え去り、まして当時は大不況、健康な人でもおいそれと就職ができる時代ではなく難聴ではなおさらな事、食事どころか電気も切られ、ローソクを灯したものの、そのローソクも買えなくなり、人生に絶望、二人して近くの鉄橋に向かった。

霧雨に濡れた鉄路を一筋の光りが走り、夜行列車が近付いてきた。

老人は母を背負い、線路に入り、夜行電車に対峙した。

母は老人の背にしがみ付き、まだ片目に包帯が巻かれた顔を押し付け、

「オラが目を患ったばっかりに……すまない……」

と激しく泣いた。

老人は痛いほどに体を堅くし、力まかせにしがみ付く母の手に息がつまり、よろけて線路から外れた。

夜行列車は激しく警笛を鳴らし真横を通りすぎた。

二人がこの世で生きるには、もはや生活保護を願いでるより他に道はなかった。

結果、願いは叶わなかった。

老人には兄弟が多く、それらが協力するべき……。それが行政が下した判断だった。

そうできるならとうにそうしてるはず、それができないから恥をしのんで申請したのであって、(行政は上辺をあたりさわりなくなぞるだけ……。決して真実は見ない……。母を看るのは俺しかいない……。)

と行政頼りを後悔、老人は石にかじりついても母を守り、二人で生き抜く決意をした。

老人は最後の切り札を使った。

切り札の当てはあった。

以前、漆器工房に出版社のカメラマンが取材にきた。

漆器工房も雑誌に掲載されるだけに大乗気、最年少の老人を木曽路の案内係りにした。

案内は三日間、初日は浦島伝説の寝覚の床、妻籠宿を紹介した。

二日目、御岳山の清滝で御岳教の滝修業の写真を撮る事になったが、生憎と行者は現れず、替りに老人がする事になった。

近くの土産店で褌を買い、滝壷に入った老人にカメラマンは目を輝かした。

老人は難聴を除けばすらりとした若鹿の肢体と、憂を含む涼し気な顔形で、人を振り返らせる容姿をしていた。
その夜、開田高原の宿で、老人はカメラマンの男に抱かれた。
カメラマンはその後、何かと口実を作っては木曽路に来て、その度に老人の体を嗇り、「困った事があれば力になる……」
と耳元で囁いた。
老人は惑う事なく公衆電話でカメラマンに今の現状を訴えた。
事の善し悪しより、米を買う金がほしかった。
ほどなくしてカメラマンから知らせが届き、その伝で体を売り、画学生のヌードモデル、外国雑誌に肢体を晒し、若さを失うまでの十数年を何とか生き延びた。
その頃の老人には体を売る罪悪感は微塵もなくただ母と生きる為の手段、無我夢中の日々だった。
意外にも男の裸体も結構需要があり、留守時母の安否は気になるものの、それなりの金にはありつけたが「金に色は付いていない」とは言うものの、味噌を買っても、米を買っても、どこか後ろめたく、母には内緒だけに母の顔を見るのが辛かった。
後年アメリカのビッグスターが、売り出す前のポルノ出演をスッパ抜かれた時、
「女房・子供を養うのに、男が何の仕事をしようが勝手！」
と一笑したが、この時の老人もこの心境で金になる体を多少は誇らしく思っていたのもまた事実で、その時のネガ・雑誌を捨てる事なく持ち続けた。

老人は、母の里山有明山から目を逸らし、田畑の日陰に格子模様で雪が残る安曇野をぼんやり眺め、槍ヶ岳の南に位置する富士山にも似た裾野を引く乗鞍岳を見入った。
老人の父は乗鞍北麓の飛騨朝日村の出身で、訳あって財産を無くし、信州坂城に嫁いでいた姉を頼り、今なら車で二時間の乗鞍と木曽御岳山の中間にある野麦峠を母親共々、二日がかり徒歩で越え、渡り大工を生業に信州各地を点々、二歳の連れ子のいた母と一緒になった。
今のように「できちゃった婚」が当り前の時代と違い（夜這い）とはいえ未婚で子持ちの母に周囲の目は冷たく、母は誰にも祝福される事なく、故郷を追われるように子供共々父の元に嫁いだ。
夜這いとは、好いた女性を襲い強引に犯し目的をとげる……その頃日本各地どこにもあった風習で、今なら強姦罪、母はその一度で身籠った。
母はそれまで松本の製糸工場で働いていて、当時はそれで当り前の朝七時から夜は八時までの生糸作りの仕事に携わっていた。
ナイロンが世に出るまでの生糸はまさに宝の山、日本の基幹産業、世界中から絹の注文が殺到、貧しい家の子は小学校にも通えず、自分の何倍もある繭籠の片付け等の下働きに駆り出され、それでも地元民だけでは手が足りず、春の一番繭の頃になると飛騨地方から残雪の野麦峠を越え多くの女工が信州にきて、秋の晩繭が終ると新雪を踏み分け野麦峠を越えて飛

騨に帰って行った。
途中に立ちはだかる北アルプス野麦峠は難所中の難所、故郷を目の前にして多くの若い命が雪の中に消えた。
その頃は今のような月給制でなく、その多くが年季奉公、一年分が親に先に前渡しされ、自分が金を手にする事はなく、休日といえば、年二回ある薮入りだけ……。
すこぶる美人の母が身籠ったのはそんな薮入りの時、母には京都から絹糸を仕入れにくる白生地問屋の恋人がいて、誰もがその人と添いとげると思っていたが、二人の恋は、はかなく終った。
母はその人がくれたペン画の清水寺の絵ハガキを後生大事と持ち続け、時々絵ハガキを胸に押し付け涙していた。

父と所帯を持ったものの、いくら飛騨の宮大工で腕は確かといっても時節は終戦明けの混乱期。人々は飢えて食うのに忙しく家屋にまでは手が回らず、父は毎日が休日、そのうち酒に溺れ、母が玄関脇で稼ぐ足踏み座繰りの生糸作りの金も、父の母が紡ぐ真綿内職の僅かな金も、すべてが戦勝国となった朝鮮の人が作るドブロクに化け、食う物とてない有様……。
老人や弟は、田端を歩くふりをして、稲穂や畦豆をポケットに盗み入れ、それを煎って空腹をしのいだ。
老人は繭のない冬季、男に混ざり、土手の石垣の日雇い仕事で疲れて帰る母の為に自分の分を半分残したが、父の分を残す事は決してなかった。
そうこうしているうちに、栄養失調から父の母が病死、後を追うように父も風邪をこじらせ急性肺炎で急死、
「父ちゃんにはもう会えんぞ！」
と母が叫ぶ悲痛な声も、
「母を苛める男が死んだ……」
そんな思いしか老人にはなかった。
父の死んだ頃、まだ独身だった老人の兄姉は、戦後の物不足が解消され、巷に溢れ始めた数々の品に目を奪われ、自分を飾る事に夢中で、さして家計の為、母の為にはならなかったが、父の酒代がなくなった分、いくらか生活が楽になった。
老人は学校の休日、燃料にする枯松葉を山に集めに行き、夏休みは灸に使う蓬刈りをする母の手助けをして懸命に働いた。
涼しい蓬の根元には、大きな蛇がうじゃうじゃいて、蛇が苦手な老人は足音をたて、蛇を追い払い蓬を刈った。
蛇のいる蓬の群生地は人も寄りつかず、それだけに丈の高い蓬がいっぱいで、生薬屋には重宝がられた。
蓬刈りは一日刈り採り生薬屋に束ねて運んでも、母が九十円、老人が五十円位にしかならなかったが、繭仕事のない夏のトヤ期には貴重な現金収入で、帰り道、蓬代から五円のアイ

スキャンデーを奮発し、母と分けあってなめたが、母は先をなめるだけですぐに老人に手渡したが、老人もまた半分ほどなめると、

「冷たくて、もう食べれん！」

と母に返した。

極貧でも人間なんとか食えるもの、教科書も買えず、弁当すら持って行けず、ひたすら食事時間の終りを校庭の隅で待ち、継ぎ接ぎだらけの夜服に中耳炎の悪臭……。同級生から鼻を摘まれ壮絶な苛めを受けながらも、老人は耐えに耐え、母に心配をかけまいと休学する事なく学校に通い続け、何とか義務教育をはたし、漆工で生きる夢を抱き社会に舟出したものの、思いとは裏腹、母の失明により夢を断念、母を背負う運命となった。

老人が永年、周囲に疎外されながらも母を背負い続けたのも、案外この頃の苛めをひたすら耐えた経験があったからに他ならなかった。

老人は溜め息を付き、空を見上げ、鳶の輪を目で追い、顔を西から東に向けた。

美ヶ原高原の主峰、「王ヶ頭」の稜線を下ると扉峠で、昔は信州松本からは上州、江戸に通じる最短距離の峠道だった。

老人は扉峠に頭を下げた。

母を看病した四十三年間には、後追いするだけの行政への不信や矛盾、人の冷淡、心の虚しさは数えきれないほどあったが、それらは時が過ぎれば心の皺もいつしか伸び、次の皺で忘れるもの……。堪えさえすれば時が洗い流してくれるが、他人には小さな事に思えて、もっとも困ったのが母の入浴だった。

当然の事ながら長屋には風呂もなく、それまでは近所の老人が近くの銭湯に連れて行ってくれ何とかしのげたが、生憎とその人が脳梗塞で半身不随、連れて行ってくれる人がいなくなった。

嫁いでいる姉にも母を週一度銭湯に連れて行ってくれるよう頼んだが、色良い返事がもらえず、当分はタライ湯ということにしたが、プロパンガスコンロは一口で、次の湯を沸かす間に最初の湯は冷めて水になってしまう……。

それでも我慢し、不満一つ言わない母に、

「……何としても湯に入れたい」

と周囲の温泉旅館に当たったが、老人が母と一緒に女湯に入る事もならず、さりとて母を男湯に入れる訳にもいかず、どこも引き受けてくれる所もなく、友から譲り受けた廃車寸前の軽トラックで各所を点々、やっと捜しあてたのが扉温泉だった。

温泉といっても地元民が山仕事の帰り汗を流す掘立小屋の風呂場で、ここの管理人がどこもが断った男と女の入浴を承知してくれ、キコリの方々も嫌がらず、母に言葉をかけ、いたわってくれた。

老人と母は、この湯に母の亡くなるまでの十六年間を火曜・金曜の周期で通い、扉温泉は母の唯一の楽しみ、他人の声が聞ける場所となった。

老人は立上り、再度扉峠に頭を下げ、土手を登り、この先にある老人福祉施設「薬師の湯」に向かった。
老人は道々、母に対し、後ろめたさを感じた。
自分一人だけが湯に入る事に咎があった。
母は何よりも風呂好きだった。
風呂好きと言うより、母は風呂以外には外の空気に触れる機会がなく、他人に飢えていた。
老人はそんな母の思いを察し、乏しい収入の中から二人で五百円の湯銭を工面し、扉温泉に通っていた。
老人は薬師の湯の建物に入った。
戦争中、この街にあった軍隊の傷痍兵の保養所として使われていたものをそのまま使っているだけに、古い木造の建物は老臭と相まって独特の臭気が漂っていた。
老人はここに通うようになってまだ日も浅く、それまでは近くの銭湯に通っていた。
老人も母に違わず湯が好きだったが、毎回払う三百五十円の銭湯代は老人にとってかなりの部分を占め、週一度で我慢していた。
銭湯に通う老人には市役所から七十歳を越えると百円で入れる割引券が渡されていたが、その年齢にまだ少し間のある老人には割引券はなく、老人達の集まりの中で、六十歳を越えると無料の温泉がある事を知り、通いだした。
銭湯とは違う天然温泉も魅力であったが、それ以上に経済的魅力の方が老人には大きく、母を乗せる必要がなくなり、中古軽トラックを手放した老人は、四キロの道を歩いて通っていた。
近くの薬師堂の地方から沸き出す源泉を引き湯している薬師の湯の洗い場は蛇口が五つしかなく、いつも満員の状態で毎日通う常連の溜り場になっていて、新規の者を妨げる雰囲気がどこかにあった。
老人も最初はそれに戸惑った。
無愛想でも話し過ぎても嫌われ、老人はひたすら周囲の人の気配に神経を使った。
老人達の話しといえば全て一方的・自己中心な自慢話、仲間と思われる老人達も、その中の一人が先に帰ると、今度は打って変わってその人の悪口に花を咲かせ、生活保護らしき人がくるとその苛めは凄まじく、
「シャワーの湯が飛んだ！」
「俺達の税金で食ってる！」
と悪口雑言、はては横に並んで脇腹を突いたりの嫌がらせをする。
昨今激しい子供の苛めは案外ここらが震源地で、老人から子に……さらには孫にと伝染しているように見え、昔も今も弱者と見ると庇うどころか、いたぶる人間の本性は少しも変らず、老人はひたすら関わり合わず、また離れすぎないように気を配った。
幸いにも老人が苛めに会う事はなかった。

なかったと言うよりは、老人は風呂に入るだけで、他の老人のように広間で平日一日がかりで居続ける訳ではなく、その風呂も十分足らず、揉め事に巻き込まれる時間的な余裕がなく、薬師湯に通う目的の大半はお気に入りの日溜りの窪地で、ぼんやりと母の生まれた里山を眺める事にあった。

老人は薬師湯を後に、いつもの土手道の窪地が見下ろせる所で立止まり、まだ半乾きの髪を撫ですいた。

その時である。

何かが頭に止まった気がして髪を手で払った。

小砂利のようなものが足元に落ちた。

それは蜜蜂だった。

冬日にやわらかく照らされた密蜂は鈍く動き、弱々しく羽根を冬日に向けて震わせ、飛んでは落ち、飛んでは落ちを繰り返し、土手下の葦の中に消えた。

老人は冬の蜜蜂に興味を持った。

「花のない、こんな冬空を、どこから来たのか？」

と首を傾げ、急いで土手を下り、蜜蜂の後を追った。

蜜蜂は休み休み、葦藪の中を進んだ。

老人も葦藪をかき分け、蜜蜂の後を付けた。

突然、目の前が開け、葦の刈り取られた空間に、蜜蜂の養蜂箱が十個ほど並んでいた。

蜜蜂は三番目の養蜂箱の前に迫り出した板の上に舞い下り、数歩先の穴の中に消えた。

老人は他の養蜂箱を見回した。

どの箱からも蜜蜂の姿はなく、辺りは静まり返り、葦の擦れる音だけが犇めいた。

老人は心配になった。

この寒さの中、先程の蜜蜂は一体何の為、どんな目的があって土手を飛んでいたのだろうか？

「偵察？」

「物見？」

「伝言？」

老人はあらゆる想像をしたが、どれも納得する結論には至らなかった。

先程の蜜蜂は養蜂箱の中でどうなったんだろうか……。

「役目を果したのか？」

「役目を果せず殺されたのか？」

老人は養蜂箱に消えた蜜蜂にもう一度会いたくなった。

一時間。

二時間。

三時間。

老人は穴から出てくる蜜蜂をひたすら待った。
養蜂箱からはそれっきり、一匹の蜜蜂も現れなかった。
老人は落胆、いつもの窪地から母の里山を見る事なく土手を上った。
アルプス下ろしの寒風で一瞬強く吹き、葦藪が激しく揺れ、口笛のような音をたて、老人は身を縮めた。

老人は締まりの悪い長屋の玄関戸を開け、中に入った。
昼間でも薄暗い湿けた二間だけの家の中は静まり返っていた。
老人が帰ると布団からいざり出て、
「帰ったかや……」
と嬉しそうな顔をする母の姿はなかった。
老人はこの長屋で生まれ、ここで育ち、ここで母と暮した。
老人が母と離れた期間は漆器修業の三年間だけ、それ以外はすべて母の姿を見て暮した。
それだけに、老人の心の中に占める母の存在は強烈で、母の居なくなった物音一つしない家の中は耐え難い空虚感に満ちていた。
老人は部屋の中を見回し、身震いした。
「決行は必ず実行する……」
老人は仏壇に合掌、勝手場に向かった。
勝手場といっても二畳ほどの板の間で、その半分は床が落ち斜めになっていた。
老人は母の食事を作り始めた。
昨今仕事を高齢で失い、老人の年金七万円から二万円の家賃を払い、その残りで暮すにはかなりの切迫感があり、食事に回せる金は僅かで、買物は慎重にならざるをえなかった。
途中で寄ったスーパーの特売品、ビンチョウマグロの塊を半分に切り、それを五切れに小分けし、皿に盛った。
山国生まれで海を知らない母は、新潟から盆と暮に行商人が運んでくる乾物の鰊棒が唯一の御馳走で育っただけに、とりわけ刺身が好きで刺身に憧れた。
それだけに老人も、できるかぎり母に刺身を食べさせたいと一人前しか買えず母だけ……と言う事も度々あったが、昼間はホテルの下働き、夜は六時から十時までの宅配便の仕分け仕事でかろうじて糊口をしのぐ身には刺身は高額で、なかなかその願いも叶わなかった。
老人は御飯と味噌汁、そして刺身を仏壇に供え、線香を灯した。
殺生物を供える事に何の違和感も老人にはなく、生前と同じく母の好物の食事を作り、夫に食べさせ、線香の消えたところでそれを老人が食していた。
二人分作っていた食事が一人分になっただけで、老人の行動は母の居た頃と何ら変る事はなかった。
老人は線香の煙を目で追った。
母を看病した四十三年間、老人は周囲にどう疎まれ、蔑すまれようが極力人と争う事を避

け続けた。
貧しき者の争いは、たとえそれが正しくとも、害がその数倍となり跳ね返る事を老人は長年の経験から知っていて、陰で悔し涙を流しても人に涙を見せる事はなかった。
母もまた老人と同じく、ひたすら嵐の過ぎ去るのを待ち、人前で涙を流さなかった。
老人が母の涙を見たのは生涯二度……。
一度目の涙は母の失明時、同じ町内に母と縁を切った長男の嫁の伯父が経営する紙箱工場があり、何十人もの人を雇い羽振り良く、町会長を始めとして、幾つもの町内役員をやり、長男夫婦の荷物を母の元から運び去り、縁を切るのに主導的役割をはたした人だった。
その伯父が老人の留守に母の元にきて、
「同じ町内で乞食暮しをされたら俺が困る。引っ越し費用は俺が出してやるから他の町に行かんか！」
と怒鳴り込んできた。
いわれてみればそれも当然、長屋は朽ち果てる寸前で右に傾き、外から見れば乞食暮しと思われても仕方のない有り様。
母は老人が帰るなり涙を流して興奮、伯父の所に連れて行くように……と言った。
老人は今まで一度も見た事がなかった母の涙に困惑、いわれるままに母の手を引き伯父の家に向かった。
玄関先に出てきた伯父に、母は声を震わせ、
「少しくらい時流に乗り、うまく行ったからって威張りますな！　貴方の親も元は籠ボテの紙屑拾い……。たまたま運が良かっただけ。いつまでも今の運が続くと思いますな！」
と手を振りかざして怒った。
近所の人が道に出て立聞きするほどの騒ぎになったが、母はこの町から出て行く気の無い事を宣言、伯父の家を後にした。
伯父にすれば町内で（姑を病院に置き去りにした……）と噂が広がり始めたので立場上目障りだったのか、ある事ない事を言いふらし、母を鬼姑に仕立て上げた。
長男も否定するどころか伯父の作り話に同調、肉親の証言だけに母は希代の悪女にされ、この件を境に伯父の圧力で町内隣近所からはますます疎まれ、二十歳になると必ず入る青年会も母の婦人会も老人の所にはその話はなく村八分のような扱い……。
人は財力には弱い者。伯父にはばかってか誰一人として老人らに味方する者もなく、家の前を通る子供までもが鼻をつまみ、
「臭い臭い、乞食の家！　町内から消えろ！」
と大声で通り過ぎ、手探りで玄関掃除をする母に石を投げる子まで出て、丁度家に居た老人が後を追い駆け、中の一人を捕まえ、植込みに投げ込んだ。
これがまた大騒ぎとなり、
「鬼の子はやっぱり鬼だ！」
と町内中ふれ回られ、たまりかねた老人は町を出る決心をして市営住宅の申し込みをした

が母は頑として町内から出る事を拒んだ。
この伯父との件が老人が最初に見た母の涙だった……。

母の二度目の涙は、母が息を引きとる直前の事……。
親族、周囲から疎外され、付き添う人の居なかった老人にとって、もっとも怖れたのは仕事中に母が一人だけで旅立つ事だった。
母の死期が迫っていたのは医師の宣告で分かっていたが、一人での旅立ちは何としても避けたかった。
老人の願いはこれ一点に絞られていた。
夕食時、肺に溜まる水を背中から抜いている管を取り替える事になった。
取替えは十分程で終った。
病室の外で待っていた老人は、医師達と入れ違いに母の元に駆け付けた。
母はうつろな目をしていた。
夕食のヨーグルトが置いてあった。
点滴の母は夕食といってもヨーグルトだけだった。
老人はベッドを起こし、ヨーグルトをスプーンに盛り、
「痛くなかった？　もう大丈夫だよ、口を開けて……。ヨーグルトだよ」
と母の口に運んだ。
母はヨーグルトを口にし、両の手を不自由そうに伸ばし、見えぬ目をしばたき、懸命に老人を捜した。
老人は母の両手を握り、自分の頬に当て、
「ここに居る。心配しないで……」
と母の耳元で囁いた。
母は環境の激変からか、高齢者の入院にはよくある「子供がえり」をしていて、老人が側に居て手を握っていても他人と勘違い、
「どこに行った！　一夫はどこだ！」
と老人を捜し、ベッドで暴れ、泣き叫んだ。
老人は母の両手で自分の顔をなぜ回し、
「今夜は宅配便の仕事は休日、一晩中母ちゃんの側に居るから……」
と母の髪を指で梳いた。
母は安心したかのように頷き、童のような笑を浮かべ、真珠のような涙を一粒だけぽろりと流した。
その瞬間、母の両手は老人の顔をすべり落ちた。
前のベッドで夫の付き添いをしている奥さんが大声で叫んだ。
「顔が真青！」
老人は母の顔に手を当て、慌てて呼出しベルを押した。

母は老人の手の中で九十七年の薄幸の生涯を閉じ、老人の願いは叶った。
この真珠の涙が、母が老人に見せた二度目の涙だった。

線香が消えた。
老人は仏壇の鐘を叩いた。
「母ちゃん、御飯食べ終った……。俺が貰うよ」
老人は仏壇の食事をコタツに移し、壁のカレンダーに丸の印を付けた。
一日誰とも会話しなかった日にはバツ印を、たとえ一口でも人と話した日には丸印をカレンダーに付けていたが、カレンダーにはバツ印の方が多かった。
食事はとうに冷めていた。
老人は温める事なく、そのまま食するのが常で、母の食事の介助をしていると老人の食事はすでに冷えていて、冷えた食事があたり前になっていた。
「もうすぐ、母ちゃんに会える……」
老人はそう呟いて食事を始めた。
冷めた食事でも、こうした好いた時間に好きなだけ食べられる自分は、他の老人に比べたら少しはましに思えた。
周囲には虐待されている老人も多く、朝一緒に家族と出て、夕方までスーパーや公園で時間を潰す老人は何人となくいた。
その間、家には鍵をかけられ、家族の誰かが帰るまで中に入れないのである。
そうかと思うと年金の少ないのを罵られ、食事は別々、それも満足な量ではなく、空腹に耐えかね握り飯一つを万引した老人もいた。
そもそも年金は、当時は公務員か一部大会社だけの制度で多くの老人は途中加入……。
年金額は小遣銭しかないのがあたり前で、人より金が大事の拝金主義な今の時代、老人は幼児虐待以上に虐げられ、外から見れば円満に見える家庭も一皮剥けば修羅の日々、地獄の毎日で、老人は死を待ち望まれている。
生まれた子供に狂喜し、懸命に育て、人生も終りに近付いて、その慈しみ育てた我が子にうとまれ、嫌われ、捨てられる。
まさに悲惨の極み、想像を絶する悲劇である……。
以前は貧しくとも、それなりに助け合う家族があり、今のような親が子を、子が親を、兄弟・夫婦が殺し合うような事は決してなかった。
いつからこんな身の毛がよだつ、殺伐とした世の中になってしまったのか……。
老人は肩をすくめ、食事の箸を置き、一人暮しの自分がなんだか幸せに思った。

その夜は、低気圧が日本海を北上、激しい南風が吹き付け、夜半には雨が雪となった。
信州で言うところの上雪である。
老人は長屋が軋む音に何度も目を覚まし、蜜蜂を心配した。

蜜蜂の養蜂箱は北風を避け、南に向いていて、養蜂箱の上には古布団、シートがかけられ、その上に廃材や石の重しが置いてあった。
老人は激しい南風にシートが剥がれ、養蜂箱が水雪に叩かれ、ずぶ濡れの蜜蜂を想像した。
「大丈夫だ……。その前に蜜蜂を飼っている人が見回る……」
老人は風の音に微睡みながらもいつしか寝入っていた。
翌朝は、昨夜の荒天が嘘のような抜けるような青空、風も止んでいた。
老人は仏壇の母に茶を供え、急ぎ家を出た。
雪の融け始めた土手を下ると、葦の藪はすべて薙ぎ倒され、散乱した養蜂箱が見渡せた。
老人の心配は的中した。
シートは周囲に飛び散り、ひっくり返り、上の蓋がむきだしの養蜂箱がいくつもあり、雪水が箱の下から流れ出て、蜜蜂の姿は一匹もなく、辺りは静まり返っていた。
老人は養蜂箱を並べ直し、周囲に飛んだ布団を乗せ、その上からシートをかけ直し、重しの廃材、石を乗せた。
朝の日が昼の日になっても蜜蜂の気配はまったくなかった。
蜜蜂は全滅、すべての蜜蜂が自分より先に母の国に旅立ったと思った。
老人はまた一人ぼっちになった。
束の間の蜜蜂との交流は終った。
老人は溜め息を付き、養蜂箱を何度となく振り返り、とぼりと土手を登り、薬師の湯に向かった。

全滅した蜜蜂を思うと気が重く、蜜蜂をあの荒れた天気の中をほったらかした飼主に腹が立ち、湯もそこそこにいつもの土手を下り、お気に入りの窪地に座った。
すでに淡雪は融け、薙ぎ倒された葦藪の先に、老人が並べ直した養蜂箱が何事もなかったかのように整然と並んでいた。
老人は寂し気に養蜂箱を見て溜め息を付き、母の里山に目を移し、枯草の上にごろ寝した。
目の中に太陽が飛び込み煌めいて、燈の色に染まった。
この煌めきすら感じる事のできなかった母を哀れみ、老人は目を閉じた。
かすかに風の渡る音がした。
懐かしい野辺の匂いがした。
老人は時々、車椅子に母を乗せ、野辺で茶を飲んだ。
老人は右手を伸ばし、まさぐった。
何時もだと、老人の手の届く先には必ず母が居た。
右手は空しく風を掴んだ。
老人は腹の底からこみ上げてくる熱い塊に涙を浮かべた。
その時である。
右の耳元でかすかな羽音がした。

左の耳は中耳炎の後遺症でまったく聞こえなかったが、その分、右耳には自信があった。
老人は起き上がり、周囲を見回した。
近くの枯草に、寒さに震えたような蜜蜂が止まっていた。
老人は、あの時の蜜蜂と思い、ゆっくりと手を差し出した。
蜜蜂は老人の指先に移った。
老人は蜜蜂に話しかけた。
「お前だけが生き残ったのか……。一人の暮しは寂しいぞ……。泣けてくるほど寂しい……」
と蜜蜂に息を吹きかけ温めた。
蜜蜂は羽根を震わせ、弱々しく飛び立った。
「お前！　この先、一人でどう生きる！」
老人は蜜蜂に向かって大声で叫んだ。
蜜蜂は老人の声に乗り、青空に消えた。
老人は蜜蜂を哀れんだ。
蜜蜂は生まれて死ぬまで、僅か三十日ほどの命しかなく、その間、ただ働くだけ……。
しかも、あきらかに自分の子ではない者を育て、天敵・スズメバチから必死に守り、苦労して集めた蜜すら人間に奪われ、さらには花が咲き終る晩秋になると、今度はハウス栽培農家に一匹一円にもならない銭単位の金でその身を売られ、養蜂箱そのものが冬を越すのはまれだと言う……。
生き物の中でも、これほど哀れなものはなく、何事も金にしてしまう人間こそ悪の根元。
五十歳台まで、何の楽しみのないまま働きずくめ、病に伏した母と蜜蜂を重ね合わせ、老人には蜜蜂が母の化身に思えた。
老人は急に立上り、養蜂箱に向かった。
蜜蜂の供養をしようと思った。
老人は近くの石を拾い、三段に積み重ねて養蜂箱の前に置き、合掌した。
その時である。
またあの羽音がした。
老人は周囲を見回し、養蜂箱の小穴に目を移した。
蜜蜂が一匹、止まり枝の上に現れ、日光に背を向け、羽根を広げ、ぐるぐると歩き回り、養蜂箱の中に消えた。
するとそれが合図かのように、次々と蜜蜂が現われて止まり枝の上はまたたく間に蜜蜂で一杯になった。
老人は狂喜し、すべての養蜂箱を見回った。
どの養蜂箱からも蜜蜂が顔を出していた。
「生きていたんだ！」
老人は養蜂箱に頬ずり、涙を浮かべた。
母が戻ってきたような気がした。

日の光に温まった養蜂箱から、ほのかに湯気が上り、何匹かの蜜蜂が老人の周囲を飛び回り、飛行機雲が白い線を描く青空に吸い込まれて消えた。
「もう逢えなくなるけど、元気に冬を越すんだぞ！　もう春はすぐそこだ！」
老人は煌めく青空に大声で叫んだ。

老人は何度も養蜂箱を振り返り、土手を上った。
澄んだ青空以上に老人の心は澄んでいた。
家の近くまで来て、老人は回り道をした。
回り道の角には、こじんまりとしたビルがあり、一階が喫茶店、二階が学習塾、三階が住居となっていて、以前は魚屋だった。
魚屋には両親と娘・弟とが居て、両親は病気がちで弱々しく、勢い高校出たてのその娘が魚屋を仕切り、早朝の魚市場の仕入れも娘がボテ付きのトラックを運転し、気の荒い男達に混ざってセリ落していただけに当然の事ながら気は強く、近所の評判は最悪で、
「生意気娘！」
「嫌味な女！」
と陰口を叩かれていたが、店は新鮮な品と相まって、大繁昌していた。
老人は若い頃からその娘に、淡い恋心を抱いていたが、相手は三代も続く周囲が認める分限者。財産一つなく、病の母を抱えた長屋暮しの老人にはまさに高嶺の花、途方もない大河が二人の間に流れていた。
老人が娘からかけられる言葉は二つだけ。
「毎度！」
「ありがとうございました！」
の商売言葉だけ、それ以外の言葉は一度もなく、まじまじと顔を見る事もなかったが、老人は娘の立居振舞を見るだけで満足していた。
中学校を十五歳の春に出て、人より猿の方が多い木曽谷で漆器修業、十八歳で母の看病を始めた老人には女との接点はなく、老人の中の女はそのすべてが老人の空想の中の妄想・想像上の生物で、娘を見る老人の目には、血の通った生身の人間とは違う絵画の中の女を見るようなどこか一線を引いた思いがあった。
数年して、魚屋の弟が東京の大学を卒業し、そのまま東京で就職、魚屋は両親と娘の三人になった。
しばらくして、娘に養子をもらい後継ぎにするとばかり思っていた老人を驚かす事が魚屋に起きた。
娘がその頃流行しだしたスーパーマーケットの息子と結婚し、名古屋に嫁いだ。
老人は落胆、娘を奪った名古屋の街、そのものまで憎んだ。
手の届かない高嶺の花と分かっていても、娘が近くに居ると居ないでは大違い、空気まで不味くなった。

娘の去った魚屋は、父親が仕切るものの、火の消えたような有り様。品質は落ち、評判はがた落ち、客足は遠のいた。
老人は魚屋の行く末を心配した。
ところが一ヶ月後、娘は突然舞い戻った。
持参した嫁入り道具共々、魚屋に戻ってきた。
老人は心が躍った。
離婚という娘の不幸より、娘が再び老人の目の中に戻った事が嬉しかった。
不味かった空気も急に美味くなった。
当然の事ながら近所雀は、
「追い出された！」
「あの気性で嫁が務まるはずがない！」
等々と、格好の茶飲み話にしたが、老人は（嫁は家業を心配し、親の為に戻ってきた……）と思い、親の為という言葉に酔い、自分の境遇と重ね合わせ、嫁を以前にも増して眩しく感じた。
老人の心の中に、再びほのかな恋心が灯った。
その魚屋は、その後しばらくは繁昌したが、近くに大型スーパーが出店、客足が遠退き、母の病死、後を追うように父も他界、それを機に魚屋を廃業、今の貸ビルに建て替えたが、魚屋を辞めてもビル持ちの分限者に変りはなく、老人にとって娘はどこまでも高嶺の花……。
どちらも一人暮しとなりながらも言葉を交す事なく、老境の今日に至っていた。
娘が住む三階の住居は、小路の横に玄関があり、幾つものプランターに季節の花が植えられ、この時期、早咲きのチューリップの芽が淡雪の上に顔を出していた。
老人は用心深く、周囲を窺い、目的をもって小路に入った。
人の気配はまったくなかった。
老人はプランターに近付き、素早くチューリップを引き抜き、ポケットに入れ、抜け跡の土をなぞった。
明後日に迫った決行に、どうしても娘の何がしかの品を手に入れたかった。
老人は逃げるように小路の角を曲り、ポケットの上を押さえ、球根を確かめた。
球根はズボンの布を通し、存在を老人の指に伝えた。
老人は、大事業を成しとげた後のような心地で道を急いだ。
「これで心残りなく決行できる……」
老人は何度となく球根を触り、その度ごとに娘と同衾しているような錯覚に襲われた。

母の一周忌が終った。
案じたとおり、弟夫婦が来ただけで、他の親族は誰一人として来なかった。
老人は交流の途絶えた兄姉に、四十九日・盆・彼岸と、仏事のあるごとに焼香を頼んだが、
「もう縁は切れてる……」

「今さら付き合う気はない……」
と葬儀同様に断られた。
病に臥し、先行き暗い境遇では、たとえ親といえども縁を切った方が何かと得には相違ないが、損得だけで物事を計る今の世の中の風潮に失望、（とてもこの先、暮せない……）
と老人が思ってもむりからず、まして母には付き添い見送る老人が居たが、老人にはそれが皆無、病に臥せば老人は路傍の石となり果てる……。
自ら命を絶つにしても、それなりの気力と体力が残っていなくてはそれも叶わず、母の一周忌を済ませた翌日が最良と心に決めていた。
人は誰しも必ず年を重ねて老いるが定めだが、親族には母と同じ「やっかい者」の烙印は押されたくなく、かろうじて若さの欠片が残っている今こそ自らの手で自らの肉体を滅ぼし、永年に渡り母を疎外した親族に面当て自死。その事によって親族の社会的立場を落し込むことが最も正しい選択、老人最後の大仕事に思えた。
四十三年間の母の看病は、看病そのものより毎日が親族との神経戦。自分の病から兄弟の対立を招いた母の心中を察し、老人はすべてを腹に収め、母の看病は自分の天命と思い、一切他人に愚痴ることもなかっただけに、その分、内に秘めた親族への憎悪の炎はすさまじく、母の死すら何事もなかったように暮す親族に自らの命をかけ復讐を謀った。
老人は弟夫婦を見送った。
弟夫婦は何も知らず帰っていった。

その夜老人は母の位牌を風呂敷に包み「乞食暮し！」とののしった長男の嫁の伯父の家跡に行った。
伯父の家は打ち壊され空地になっていた。
一時は繁昌していた伯父の紙箱事業も、次々と出回る新材料の容器に押され、仕事は激減、多額の借金で倒産、伯父は失意のうちに病に臥し、二間の市営住宅で誰にも看取られず半年前に亡くなった。
老人は、風呂敷から母の位牌を取り出し、空地に立て、
「母ちゃん、仇がとれたね。母ちゃんの言ったとおり我が世の春はいつまでもは続かない……」
と位牌を愛しくなぜ、
「祇園精舎の鐘の声。
諸行無常の響あり。
沙羅双樹の花の色。
盛者必衰の理を表す。
おごれる人も久しからず。
唯春の夜の夢の如し。
たけき者も遂にはほろびぬ。

偏に風の前の塵に同じ」
と平家物語の冒頭を口ずさみ、位牌を強く抱き締めた。
伯父の家跡から帰ってきた老人は、母の位牌をそのまま旅行鞄に入れ、数々の母との思い出が残る部屋の中を感慨深気に見回した。
片付けたはずの部屋の隙間に紙オムツが一枚あった。
母の残りの紙オムツだった。
老人は日に何度も母の紙オムツを換えた。
紙オムツは漏れる事はなかったが、臭いは布団にこもる。
老人は他の事は倹約しても、紙オムツだけは決して倹約せず、スーパーの売り出しを待って、買い溜めした。
老人は紙オムツを母に届けるべく、鞄の中に入れた。
「……後は今夜の夜行に乗るだけ」
老人は頬を叩き、気合を入れ、位牌の抜けた仏壇に目を落とし、嗚咽した。

朝の日が、比叡の木立を射貫くと、靄った琵琶湖が一瞬にして黄金色に煌めいた。
岸辺は枯葦と若芽の葦が入り混じり、吹き抜ける風が、口笛を鳴らすような音をたてた。
老人が、この世の最後の地を、琵琶湖畔の坂本と決めたのには訳があった。
坂本は比叡山延暦寺への入口で、半世紀前、老人の唯一の友が修業僧に入った所だった。
貧しく、激しい苛めにあった老人と、分け隔てなく付き合ってくれた心の友だった。
明治から続く老舗衣料品店の息子として、何不自由なく暮していた彼が高校二年の時、悲劇が起きた。
親族の連帯保証で莫大な借金を抱え両親は自殺、身寄りを一度に失った彼は、遠縁にあたる僧侶の勧めで両親の供養共々、延暦寺の修行僧となった。
延暦寺に向う途中、彼は老人の居た漆器工房に立寄り、二人は再会を約し、木曽・奈良井駅で別れた。
その後一度だけ、百日回峰の行をした証の書が届いたが、いつしか音信も途絶え今日に至ったが、老人は高僧となった彼を想像し、彼が俗世を捨て、仏門に入った坂本があの世への入口、つまりは母の住む黄泉の国へと続く出発点に思え、終焉の地と決めていた。
老人は周囲を見回した。
人の影はどこにもなかった。
老人は靴を脱ぎ、鞄と揃え岸辺に置き、左右のポケットに小石を詰め込み、左手には魚屋の娘が愛でたチューリップの球根と紙オムツ、右手に母の位牌と、母の初恋相手がくれた清水寺の古いペン画を握り締め、水面に足を踏み入れた。
水は思いの外、温かかった。
葦藪から一斉に水鳥が飛び立った。
老人は葦をかき分け進んだ。

水の底はぬるつき、巻き上った泥水が老人の膝まで迫った。
老人は詰めた息を一度に吐いた。
脳裏に生前母が漏らした言葉がよぎった。
「オラが目を患ったばっかりに、お前の幸せを奪ってしまった……」
老人は首を振り、目をしばたいた。
「他人からは不幸に見えてもそれは他人が思うもの。俺は母ちゃんと暮せて幸せだった。どんな立場になろうとも親は親、子は子。生まれ変りがあるならば、もう一度母ちゃんの子になりたい……」
老人は何度も頷いた。
水は胸元まで迫った。
老人は目を閉じた。
「死ぬのではない、再び母と暮す為に死ぬのだ……」
母の元までは後一歩。
老人は最後の片足を浮かせた。
その時である。
葦を渡る風の中にかすかにあの羽音がした。
老人は足を戻し、目を開けた。
右の肩に蜜蜂が舞い下りた。
老人は驚愕した。
「あの土手下の蜜蜂……」
信濃路からは遠く四百キロも離れたこの地に、あの蜜蜂が来るはずもないが、老人にはあの時の蜜蜂に思えた。
老人は蜜蜂を目で追った。
蜜蜂は肩から母の位牌の先に下りて来て、羽根を振るわせた。
老人は戸惑った。
「このまま沈めば蜜蜂も死ぬ……」
老人は蜜蜂を球根で弾いた。
蜜蜂はその度に背を向け、位牌の上を歩き回り、黄金色の水面が白い漣に変っても飛び立つ気配はなかった。
岸辺で人が犇めき、小舟が近付いてきた。
老人は無心で蜜蜂を見続けた。

老人がかすかな笑を浮かべ、心不全で母の元に旅立ったのはそれから四年後、信濃路が野沢菜漬け一色に染まる初霜の下りた晩秋の夕暮時。長屋の玄関前には漬ける前の野沢菜が二束ぽつんと置かれ、葉先には二匹の蜜蜂がたわむれていた。